

働く

頼みの失業給付 受給に要件

新型コロナウイルスの感染拡大の影響でさまざまな種類の雇用環境が悪化している。倒産や解雇で収入の途絶えた人にとって、頼みの網は雇用保険だ。求職者が多く訪れるハローワークでは、受給申請の要件を緩和するなど対応が追われている。ただ、だれでももらえるわけではない。条件や手続きを押さえておきたい。

（編集委員 升田一憲）

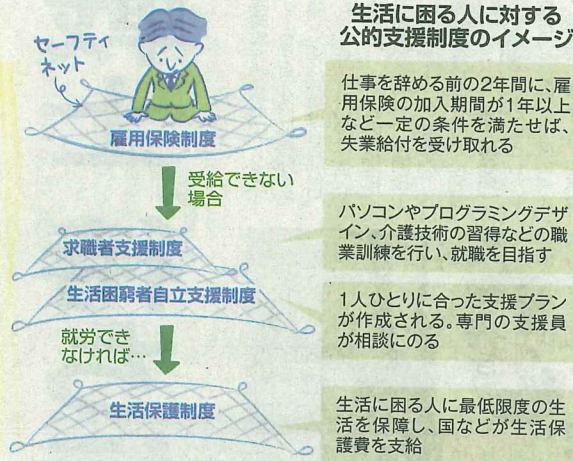
コロナ禍 悪化する雇用環境

「駆け足の説明ですが、よく聞いてください」。札幌市中央区のハローワーク札幌では、失業者対象の雇用保険説明会が随時、開かれている。通常は札幌都心部の会場に求職者を集め、約2時間行つたが、今は30分に短縮して職員が交代で行う。例年、この時期は年度末に退職した人も多く訪れ、混んでいる。

札幌近郊の土木建築会社に勤めていた30代男性は4月中旬、発熱したことを社長に告げると、1週間休むように言われた。札幌近郊の土木建築会社に勤めていた30代男性は4月中旬、発熱したことを社長に告げると、1週間休むように言われた。札幌近郊の土木建築会社に勤めていた30代男性は4月中旬、発熱したことを社長に告げると、1週間休むように言われた。

回復後に会社に出ると、木材をのこぎりで切断し、袋詰めする作業を命じられた。連日の作業に疲労し、胃腸炎に。受注減の人員削減で退職を促す陰湿な嫌がらせだった。4月末で解雇された男性は「納得できない」と憤る。3月に結婚したばかりで、「生活をどう立て直したらいいのか答えが見つからない」と表情を曇らせた。

コロナ禍の影響は多方面に及ぶ。1月から事務職を中心に求職中という札幌市北区の40代女性も「求人件数が日を経るごとに減っている。こんな調子で仕事が見つかるだろうか」と不安を隠せなかった。



雇用保険に6カ月以上加入 ◆ 求職活動「無理ない範囲で」

雇用保険をもらうため、多くの求職者が訪れるハローワーク札幌の入り口。札幌市中央区



雇用保険をもらうため、多くの求職者が訪れるハローワーク札幌の入り口。札幌市中央区

複雑だ。仕事を辞めた時の年齢や資金などで期間は90〜360日と幅がある。例えば、雇用保険の加入期間が25年以上の53歳が会社都合で解雇されたら給付日数は330日だ。加入期間4年の27歳が自己都合で退職したら90日だ。1日当たりの受給額は退職前の賃金の45〜80%で、年齢区分ごとに上限がある。賃金の低い人ほど率は高い。

雇用保険の給付は、再就職への支援が狙いのため、企業への履歴書送付、面接試験、職業相談など、具体的な求職活動を4週間内に2回、求めている。しかし、コロナ禍では感染拡大の防止も必要で、厳格な活動実績は求めている。ハローワーク札幌の小間一成給付課長は「無理のない範囲でお願いしたい」。

一方、週20時間以上勤務する労働者に対し、企業は雇用保険への加入義務があるが、入らないまま解雇され、失業者がハローワークで分かる場合もある。加入手続きは企業がさかのぼって行うこともできるが、小間課長は「給与明細の項目を事前に見るなど、普段から確認を」と話す。

失業給付は何らかの事情で退職後、次の仕事を見つけたら退職の保険で、正式には基本手当と言われる。離職者が新たな仕事を早く見つけてもらうため、当面の生活費を援助する。会社と労働者が双方で払う雇用保険から支給されている。

一定の要件が必要ですがすべての離職者がもらえるわけではない。雇用保険の加入期間、離職理由などによっても違う。転職や起業など自発的な離職では退職日前の2年間に加入期間が1年以上、解雇や倒産による場合は1年間に6カ月以上の加入が必要だ。

働く能力や意思があるのにかかわらず、失業状態であることも不可欠だ。再就職の意思がなかったり、病气やけがで働くけないという人は原則もらえない。

失業給付の受給額の仕組みは

雇用保険を活用できない人には、就職に必要な技術を身に付けられ、一定の条件で給付金が支給される求職者支援制度などがある。小樽商科大の国武英生教授（労働法）は、これらの制度が労働者には十分に知られていない点を指摘し、「失業者が今後、増える可能性も予測されるだけに、行政は積極的に公的支援策の情報を発信し、求職者が少しでも自立できるよう長期的な視点での支援をお願いしたい」と話す。

文化・エンタメ

梯久美子

ほっかいどう鉄道探偵

岩手県の花巻高等学校で教師をしていた宮澤賢治が、26歳の生徒を誘って北海道に修学旅行に行ってきたのは、1924年(大正13年)5月。ちょうどいまの季節である。

花巻駅を出発したのは5月19日。青函連絡線と津軽海峡を渡り、函館駅から汽車に乗って、20日に小樽駅で下車した。



賢治が書いた「修学旅行復命書」という文章が残っている。旅行後、学校へ提出した復命書で、記述は小樽が絡まっている。

▲午前9時小樽駅に着。車は丘上の高等商業学校を参観し、この高等商業学校は、現在の小樽製菓大学。ここで取引実習や商品標本を見学し、小樽公園へ。少し休憩した後、一行は午後0時半汽車に乗って札幌に向かった。

函館本線の小樽・札幌間の車窓の景色を、賢治はこう描写している。越前川の橋である。▲海色、丸勝、唐土丘陵地に美しく須賀利を眺める。耕田あり、今正に厩肥を加へ耕田行はる。農具、操作は郷土に異り興多し。



小樽から海に向かう列車の車窓風景。賢治が「海色丸勝」と記した右狩野は増やかった。

宮澤賢治先生の修学旅行



賢治が訪れた2年後の1926年(大正15年)、「小樽新聞」(現北海道新聞)が小樽で初めて撮影した航空写真(小樽市総合博物館提供)

札幌向かう汽車は、左に海、右手に丘陵地が走る。賢治は海の美しさを述べた後、右手、つまり南側の丘陵地に目をやる。そこは須賀利が栽培されていた。



確かに、越前川にしかなく、手前では、丘が線路の近くまで迫っている。いまは人もとりもたずした林になっているが、あのあたりで入道利(ノコギリ)を栽培していたのだろうか。



小樽駅近郊の花園橋で撮られた列車。左に分岐しているのが小樽駅に向かう函館本線、右側が1985年に廃止された手宮線(大正一昭和初期に撮影、小樽市総合博物館提供)

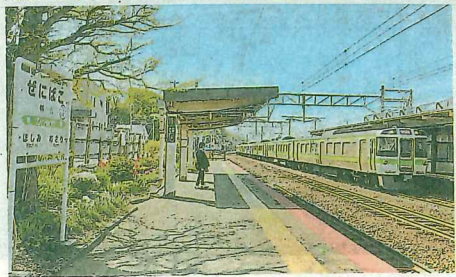


「それ、グスベリでないの?」
「一緒にいた姉が、横から画面を覗きこんで言う。
グスベリ、確かにそうだが、調べてみると、グスベリは北海道弁で、グスベリ(Gosuberi)がなまったものらしい。グスベリはセイヨウノコギリのことなら、賢治、あのセイヨウノコギリは東北地方にも分布するから、地元の手紙でも載っている農家があったのかも知れない。
現代の読者、作家・詩人としての賢治としても自分が行くことがこの世の彼は学校の教師である。その後の人生でもつねに心にあったのは、寒冷地である東北の農業の本と、農民の手植のことで、死の直前まで、近隣農家の肥料の担がに乗った。



それにして、走る汽車の窓から見ただけで、農作物の種類を特定している賢治はさすがで、ヨウソウノコギリは東北地方にも分布するから、地元の手紙でも載っている農家があったのかも知れない。
現代の読者、作家・詩人としての賢治としても自分が行くことがこの世の彼は学校の教師である。その後の人生でもつねに心にあったのは、寒冷地である東北の農業の本と、農民の手植のことで、死の直前まで、近隣農家の肥料の担がに乗った。

- ①小樽公園からの眺め。水平線の先に増毛山地の主峰、響響別岳が見える
- ②JR小樽駅。奥方向にある丘でスグリが栽培されていたという



札幌駅に到着したのは午後1時40分。復命書では、種物園、中島公園、狸小路、サッポロビール工場、北海道大学など、さまざまな場所が詳細に描写されている。賢治が「エッセイナル サッポロ」と呼んだ札幌見物の様子は、また次回紹介することにする。

(ノンフィクション作家、写真)